

領域「健康」の指導法に関する一考察
～保育実践教科書の分析を通して～

伊 藤 数 馬

愛知東邦大学

領域「健康」の指導法に関する一考察 ～保育実践教科書の分析を通して～

伊 藤 数 馬*

—目次—

- 1 求められる幼稚園教諭とは
 - 2 新しい学習指導要領
 - 3 モデルカリキュラム
 - 4 保育実践教科書の分析
- おわりに

1 求められる幼稚園教諭とは

保育現場や保育環境に対するニーズが多様化する中、養成機関に対しては、より質の高い保育者の育成が望まれている。渡邊（2015）は「保育者の質には、専門的知識や技術や判断力など、知的部分も含まれるが、子どものモデルとしての振る舞い、すなわち学生自身の習慣も視野に入れなければならない。」としている。また碓井（2011）は「保育の質は保育者の個人的な資質だけでなく、保育内容の正しい理解と専門的知識を有していることが重要で、養成段階において少なくとも保育内容の領域自体の理解と領域の専門的知識を有することが必要である。」としている。

保育教諭養成課程研究会は『幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究』の中で「幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培うことから、いかにして質の高い幼児教育を展開・充実させるかは、子どもの人格形成を目指す学校教育の重要な課題である。このため、その幼児教育の中核を担う教員の資質能力の向上は、喫緊の課題であり、特に、社会環境の急速かつ大きな変化や幼児教育をめぐる諸課題に対応する中で、幼稚園教育の質保証をするためには、幼児期の学校教育を実践していく専門家としての資質能力を検証しつつ、幼稚園教諭の養成段階から現職段階への一貫した理念のもとで人材育成することが不可欠である。」としている。また幼稚園教諭の養成段階に求められることにおいて「特に、養成段階では、幼稚園教育についての基礎的な知識や理解、技能を修得することが課題であるが、これらの修得過程を通して、『実習などいろいろ大変だが、やっぱり子どもが好き』という、子どもに対する温かな関

* 愛知東邦大学教育学部

心や感情を持つことである。こうした幼稚園教諭としての成長を見通した上で、その養成段階で何かを理解し身に付けるかを考える必要がある」とし、下記のような図を示している。

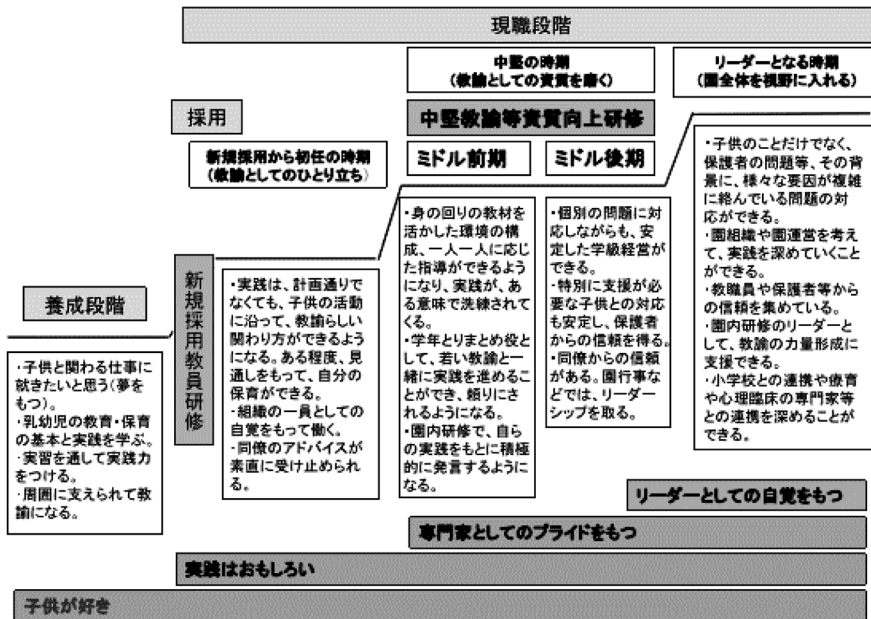


図1 幼稚園教諭・保育教諭としての成長過程

平成28年度文部科学省「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究委託」「幼稚園教諭・保育教諭のための研修ガイドⅢ—実践の中核を担うミドルリーダー養成—」(保育教諭養成課程研究会)より

時代の多様なニーズにより、子どもを取り巻く環境が大きく変化をしている。それらに対応するため、幼稚園教諭に求められる資質も大きく変化している。養成機関としては、こういった時代の多様なニーズを踏まえた上で、専門的な知識や技術等の知的部分はもちろん必須であるが、子どもに対する温かな関心や感情を大切にしながら、自己成長力を備えた幼稚園教諭を養成していくことが求められているのではないかと考える。

2 新しい学習指導要領

平成30年4月より幼稚園教育要領が改正され、施行される。

新しい幼稚園教育要領では、幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として「知識・技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の3つを記載し、また自己制御や自尊心などのいわゆる非認知的能力の育成など、現代的な課題を踏まえた教育内容の見直しを図ることを示している。

5歳児修了時までには育ってほしい具体的な姿を明確にし、以下の10項目を示し、幼児教育の学びの成果が小学校と共有されるよう工夫・改善されている。

- (1) 健康な心と体
- (2) 自立心
- (3) 協同性
- (4) 道徳性・規範意識の芽生え
- (5) 社会生活との関わり
- (6) 思考力の芽生え
- (7) 自然との関わり・生命尊重
- (8) 数量・図形、文字等への関心・感覚
- (9) 言葉による伝え合い
- (10) 豊かな感性と表現

幼稚園教育要領では、育ちの方向性を示すものとして、保育内容は、心身の健康に関わる「健康」、人との関わりに関する「人間関係」、身近な環境との関わりに関する「環境」、言葉の獲得に関する「言葉」、感性と表現に関する「表現」の5つの領域が示されており、これらの領域は領域別に発達していくものではなく、相互に関連しあっているため、小学校のように教科別の学習指導と性格が異なるものとして取り扱われている。

榎沢（2010）は「5領域の中でも『健康』は、子どもの生活の基本的要素で構成されているので、他の領域に示された『ねらい』を達成するための基盤となり、よりよいコンディションのもとで活動が展開されることを支えるなど、他の『領域』の土台のような役割を果たすという側面をもっている。心身の健康はすべての発達の基盤であり、領域『健康』全体が、幼稚園や保育所での生活、さらには乳幼児期の生活全体を支える基礎的事項で構成されているからである。」としている。

領域「健康」では、自分のからだとの出会いについて大きくまとめられており、新しい学習指導要領でも目的は変わらず、「健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う」としている。そのためのねらいとして次の3つが挙げられている。

- (1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。
- (2) 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。
- (3) 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。

また内容として以下の10項目が挙げられている。

- (1) 先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。
- (2) いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。

- (3) 進んで戸外で遊ぶ。
- (4) 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。
- (5) 先生や友達と食べることを楽しみ、食べ物への興味や関心をもつ。
- (6) 健康な生活のリズムを身に付ける
- (7) 身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でする。
- (8) 幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する。
- (9) 自分の健康に関心を持ち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。
- (10) 危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する。

新しい学習指導要領においては、5歳児修了時までには育ってほしい具体的な姿が明確に示されており、その内容については「数量・図形、文字等への関心・感覚」という項目もあり、幼児期だけを見据えたものではなく、その後の小学校への学びの連続性が意識されている。幼少連携という言葉が使用されて久しいが、幼児教育の学びの成果が小学校と共有されるよう工夫・改善される意図がみえる。

領域「健康」については、ねらい・内容ともに大幅な変更点はないが、他の領域の土台のような役割を果たすという側面を持っており、幼稚園教諭にとって、保育内容の正しい理解と専門的知識を有していることが重要である。

3 モデルカリキュラム

保育教諭養成課程研究会は、教職課程コアカリキュラムが作成される「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。）」及び「幼児理解の理論及び方法」については、作成予定の教職課程コアカリキュラムの趣旨を踏まえて、独自の科目や、留意事項、考えられる授業をモデルとして作成し、留意事項や考えられる授業モデルとともに下記の通り提案している。

○「領域に関する専門的事項」のモデルカリキュラム（保育教諭養成課程研究会，2017）

「幼児と健康」

全体目標：

当該科目では、領域「健康」の指導に関する、幼児の心身の発達、基本的な生活習慣、安全な生活、運動発達などの専門的事項についての知識を身につける。

(1) 幼児の健康

一般目標：幼児期の健康課題と健康の発達の意味を理解する。

- 到達目標：1) 乳幼児期の心と体、運動発達などの健康課題を説明できる。
2) 健康の定義と乳幼児期の健康の意義を説明できる。

(2) 体の諸機能の発達と生活習慣の形成

一般目標：幼児期の体の諸機能の発達と生活習慣の形成を理解する。

- 到達目標：1) 乳幼児の体の発達的特徴を説明できる。
2) 乳幼児の基本的な生活習慣の形成とその意義を説明できる。

(3) 安全な生活と病気の予防

一般目標：安全な生活と怪我や病気の予防を理解する。

- 到達目標：1) 幼児の安全教育・健康管理に関する基本的な考え方を理解している。
2) 幼児期の怪我の特徴や病気の予防について説明できる。
3) 危険に関しリスクとハザードの違いと安全管理を理解している。

(4) 幼児期の運動発達と身体活動

一般目標：幼児期の運動発達の特徴と意義を理解する。

- 到達目標：1) 乳幼児期の運動発達の特徴を説明できる。
2) 幼児期において多様な動きを獲得することの意義を理解している。
3) 日常生活における幼児の動きの経験やその配慮など身体活動の在り方を説明できる。

○「保育内容の指導法」のモデルカリキュラム（保育教諭養成課程研究会，2017）

保育内容「健康」の指導法

全体目標：

領域「健康」は、「健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活を作り出す力を養う」ことを目指すものである。幼稚園教育において育みたい資質能力について理解し、幼稚園教育要領に示された領域「健康」のねらい及び内容について背景にある専門領域と関連させて理解を深め、幼児の発達に即して、主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身に付ける。

(1) 領域「健康」のねらい及び内容

一般目標：幼稚園教育要領に示された幼稚園教育の基本を踏まえ、領域「健康」のねらい及び内容を理解する。

- 到達目標：1) 幼稚園教育要領における幼稚園教育の基本、領域「健康」のねらい及び内容並びに全体構造を理解している。
2) 領域「健康」のねらい及び内容を踏まえ、幼児が経験し身に付けていく内容と指導上の留意点を理解している。
3) 幼稚園教育における評価の考え方を理解している。

4) 領域「健康」において幼児が経験し身に付けていく内容の関連性及び小学校の教科等とのつながりを理解している。

(2) 領域「健康」の指導方法及び保育の構想

一般目標：幼児の発達や学びの過程を理解し、領域「健康」に関わる具体的な指導場面を想定した保育を構想する方法を身に付ける。

到達目標：1) 幼児の心情、認識、思考及び動き等を視野に入れた保育構想の重要性を理解している。

2) 領域「健康」の特性及び幼児の体験との関連を考慮した情報機器及び教材の活用法を理解し、保育構想に活用することができる。

3) 指導案の構造を理解し、具体的な保育を想定した指導案を作成することができる。

4) 模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けている。

5) 領域「健康」の特性に応じた現代的課題や保育実践の動向を知り、保育構想の向上に取り組むことができる。

また「幼児と健康」において考えられる<授業モデル>として

- ・「健康に関する現代的課題が身近でかつ広範囲にわたっていることを理解するため、最近の子どもたちの生活や体力などの資料を提示し、子どもの健康に関する課題を考える機会を設ける。」
- ・「幼児の気になる姿や体のおかしさなどを学生自らが考える機会を通して、そのほとんどが幼児の健康に関わる身近な問題であることを理解し、その背景について考える。」
- ・「危険に関し、リスクとハザードの違いとその内容を理解するため、幼児にとっての危険な場所や遊び方など実際に探したり体験したりするなどの機会を設ける。」
- ・「身近な環境や遊具などを活用し、投げるやころがるなどの多様な動きを理解し、これらの動きを引き出す環境を体験しながら理解する機会を設ける。」としている。

さらに「保育内容『健康』」の指導法において考えられる<授業モデル>として

- ・「食事や着脱、清潔などの生活習慣や災害時の安全に関する指導については、具体例を示す資料や視聴覚教材などのICTを活用し、幼児の具体的な活動の仕方や行動について理解できるようにする。」
- ・「様々な遊びの場면을幼児の多様な動きの経験などの視点から捉えながら、幼児期の運動発達に沿った運動指導の留意点と教師の役割を具体的な場面にに基づき考える」
- ・「日常生活における幼児の身体活動を理解し、遊びや生活の場面において動きを引き出す様々な環境や動線に配慮した環境を構成したりするために、これらを体験しながら理解する機会を設ける」
- ・「幼児の健康に関わる現代的な課題や保育実践について、映像資料や事例等を通して具体的な

幼児の姿を基に理解し、実態に沿った教師の援助や環境の構成について考える。」

- ・『『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』のうち、領域『健康』と関係の深い『健康な心と体』をはじめ、『自立心』『協同性』『道徳性・規範意識の芽生え』などを取り上げ、幼児の発達を理解するために必要な教師の視点について、具体的な事例を基に考える。」
- ・「模擬保育においては、教材及び音楽再生機器等の効果的な活用を検討し、振り返りの際にICTを活用し視覚化したりなどしながら、学生同士が意見を交換する等、協議する機会を設ける。」
- ・「小学校の教科等とのつながりについては、小学校の授業等を参観するなどの機会を通し、領域『健康』において幼児が経験し身に付けていく内容と小学校の各教科等とのつながりを理解できるようにする。」としている。

国際化、都市化、核家族化、少子高齢化、地域の子育て力の低下、児童虐待の増加、女性の社会進出が一層進み、幼児教育へのニーズもますます多様化してきている。

社会環境や生活様式の変化などから、運動の機会の減少や生活習慣の乱れが生じており、子どもの体力や運動能力が長期的に低下傾向であることが近年指摘され続けている。自分のからだの扱い方がわからず、けがが多いことやテレビゲームに夢中になって戸外に出ない子どものことなどが問題とされている。また、基本的な生活習慣が確立されず、いつまでも身の自立ができていない子どもの実態が話題となることも多い。

平成13年度中央教育審議会答申「子どもの体力向上のための総合的方策について」では、幼児教育の充実として、次のように言及されている。

「幼児期は、体力を培う上で、非常に大切な時期であり、この時期に運動や遊びの中で十分に体を動かすことが必要である。このような経験により体力が培われることは、生涯にわたって健康を維持し、積極的に学習活動や社会的な活動に取り組み、豊かな人生を送るための重要な要素となる。幼児期の体力は、一人ひとりの幼児の興味や生活経験に応じた遊びの中で、幼児自らが十分に体を動かす心地よさや楽しさを実感することでつくられることから、幼稚園など幼児教育において、幼児が体を動かす機会や環境を充実することが必要である。」

幼児期を生涯にわたって必要になる健康の基礎をつくる時期と位置づけ、主体的にからだを動かす活動に取り組むことの重要性が記されている。

今回提案されているモデルカリキュラムでは、従来「保育内容の指導演法」だけであったものを、「領域に関する専門的事項」「保育内容の指導演法」と分けて編成されている。領域「健康」に関する専門的な知識の理解の重視はもとより、時代の多様なニーズに応えることができる指導実践力の養成が求められている。具体例を示す資料や視聴覚教材などのICTを活用するなど、教育方法についても新しい時代の教育に対処すべく提案がなされている。

4 保育実践教科書の分析

幼稚園教諭における領域「健康」の効果的な指導法について検討するため、領域「健康」における7冊の保育実践教科書の分析を行った。新しい学習指導要領においては、ねらいや内容について、大きな変更がないため、保育実践教科書の内容について大幅な変更は考えにくい。比較分析した考察を以下3点に示す。

- (1) 出版年度の新しい教科書になるにつれ、基礎理論的な内容よりもカラー写真や画像などを使用した具体例・実践例が多く掲載されていた。それは、基礎的な知識の理解はもちろん重要であるが、実際の現場で起きている幼児の姿とリンクさせることでより理解を深めようとする意図がうかがえる。授業での学生の反応を振り返っても、こうした具体的事例を基に、自己体験や教育実習での子どもの様子と重ね合わせ、納得している様子が多く見られる。モデルカリキュラムの中にも「具体例を示す資料や視聴覚教材などのICTを活用し、幼児の具体的な活動の仕方や行動について理解できるようにする。」とあったように、今後は動画等、視聴覚教材の活用との併用を意識した教科書の内容も考えられるのではないかと考える。養成機関の課題としてよく挙げられる知識の理解と現場での実践をどのように結び付けるかについて、こうした教材を創意工夫して活用することにより、解消する糸口になるのではないかと考える。
- (2) 領域「健康」のどの保育実践教科書においても、幼児の心身の発達、基本的な生活習慣、安全な生活、運動発達などの専門的事項により大別されている。領域「健康」については、幼児の生活基礎全般が多岐にわたって内容として扱われているため、養成機関においては、専門的事項によって複数の教員が担当するオムニバス形式を採用しているところが多いのが現状である。保育実践教科書についても、専門的事項により、担当者が分担されているものがほとんどであった。
- (3) 幼児期の学習内容についても、幼児期だけを見据えたものではなく、その後の小学校への学びの連続性が意識されている。幼児教育の学びの成果が、小学校と共有されるよう工夫・改善される意図がみえる。幼児期の「遊び」が「学び」へと変容していく見通しを持ちながら子どもの育ちを見守る姿勢が必要である。

おわりに

本研究では、領域「健康」における指導法について、今後求められる幼稚園教諭とはどういった人材なのか、平成30年4月から施行される新しい学習指導要領はどういった内容なのか、保育教諭養成課程研究会が発表した『幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究』におけるモデルカリキュラムはどういった内容なのか、既存の保育実践教科書はどういった構成なのかなど、多くの視点から考察を試みた。

養成機関としては、時代の多様なニーズを踏まえた上で、領域「健康」に関する専門的な知識や技術等の知的部分はもちろん必須であるが、子どもに対する温かな関心や感情を大切にしながら、自己成長力を備えた幼稚園教諭を養成していくことが求められているのではない。

領域「健康」における保育実践教科書について、内容については大幅な変更はないものの、具体例を示す資料や視聴覚教材などのICTの活用を通して、幼児の具体的な活動の仕方や行動について理解できるよう構成されている。時代が新しくなっても、子どもに必要な事項は不変であるが、その内容を理解する方法は様々な創意工夫によって活用されるべきである。

今後の課題としては、領域「健康」に関する具体的な教育内容の実践事例を考察検討し、時代の多様なニーズに対応し、専門的な知識や技術等を備え、子どもに対する温かな関心や感情を大切にしながら、自己成長力を備えた幼稚園教諭を養成することに資するよう、研究を続けていきたい。

引用参考文献

- 井狩芳子 (2014) 『演習 保育内容「健康」—大人から子どもへつなぐ健康の視点』 萌文書林
ヴィゴツキー著・土井捷三・神谷栄司訳 (ヴィゴツキー 2003) 『「発達」の最近接領域』の理論』 三学出版
- 碓井幸子 (2011) 「今日求められる保育の質と保育者養成の課題—保育内容に要求される保育の専門性—」
清泉女学院短期大学研究紀要, 第30号, 11-21
- 碓井幸子 (2017) 「幼児教育を学ぶ学生の保育実践力を養う教材研究の方法と課題」 清泉女学院短期大学研究紀要, 第35号, 1-11
- 榎沢良彦、入江礼子 (2010) 『シードブック 保育内容健康』 建帛社
- 大森宏一 (2017) 「保育内容 (健康) における「健康」の定義について」 『富山短期大学紀要』 第52巻, 115-123
- 河邊貴子 (2008) 『演習 保育内容健康』 建帛社
- 河邊貴子、柴崎正行、杉原隆 (2011) 『保育内容「健康」』 ミネルヴァ書房
- 菊池秀範、石井美晴 (2005) 『子どもと健康』 萌文書林
- 近藤充夫 (2005) 『領域 健康』 同文書院
- 近藤充夫、杉原隆、森司朗、吉田伊津美 (1998) 「最近の幼児の運動能力」 『体育の科学』 851-859
- 斎藤孝 (2000) 『身体感覚を取り戻す』 NHKブックス
- 藤田一郎 (2016) 「学生への質問紙調査による保育内容『健康』教育方法の検討」 『福岡女学院大学紀要人間関係学部編』 (17), 85-90
- 古市久子、矢内叔子、新實広記、伊藤数馬 (2015) 「保育士・教員養成課程の表現科目における共感的要素を使った教授法 I —保育実践教科書を分析する—」 『東邦学誌』 第44巻第2号, 91-110
- 武藤隆 (2007) 『事例で学ぶ保育内容 領域 健康』 萌文書林
- 村岡眞澄 (2005) 「これからの保育者養成に向けて—領域『健康』から捉える専門性—」 『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』, 第8号, 107-113
- 文部科学省 (2017) 「平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究—幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える—」
- 渡邊晴美 (2015) 「保育内容『健康』の教育内容と方法に関する一考察」 『福岡女学院大学紀要人間関係学部編』 (16), 47-53

受理日 平成29年10月2日